Toyota Municipal Museum of Art
Press Release

豊田市美術館　プレスリリース

2026.07.08

Toyota Municipal Museum of Art
豊田市美術館

《種まく人−みかん》2021 年　作家蔵

長谷川 繁　ペイン天狗
Shigeru Hasegawa, paint-TENGU

豊田市美術館
2026年10月24日[土] ー 2027年1月24日[日]

開館時間: 午前10時-午後5時30分(入場は午後5時まで)
休館日: 月曜日（11月23日、1月11日は開館）、年末年始2026年12月28日-2027年1月4日
主催: 豊田市美術館
協力: Satoko Oe Contemporary
協賛: 株式会社サンゲツ
会場: 展示室1-5
観覧料

	一般	高校・大学生	中学生以下
当日窓口販売	1,300円	1,000円	無料
オンライン販売	1,100円	800円	

＊前売券及び20名以上の団体は当日料金から200円割引
＊同時開催の井田照一展も見られるお得なセット券を販売します（オンライン限定）。
　一般: 2,000円、高校・大学生: 1,500円
＊前売券販売所、セット券詳細、その他観覧料の減免や割引等については、当館ウェブサイトをご確認ください。

開催趣旨

絵画につかまれた人。長谷川繁（1963-）は絵画に憑かれ、絵画を描くために生きてきたといっていい。それくらい頭の中は絵のことでいっぱいである。

愛知県立芸術大学大学院修了後、1989 年にドイツに渡りデュッセルドルフ芸術アカデミーでヤン・ディベッツに学んだ長谷川は、日本人である自分が、西洋由来の「絵画」を描くことの困難に直面し、千本ノックのように絵を描き続ける日々を送ります。石ころを積んだような、あるいは石ころが崩れ落ちたような暗さを湛えたこの時期の絵画は、あたかも賽の河原、シジュフォスの神話がそのまま形をとったようにも見えるでしょう。こうして、これまでの絵を「捨てる」ための、自己の弔いともいうべき制作の日々を過ごしたのち、1992 年にオランダに移ると、アムステルダムにあるデ・アトリエーズでのレジデンスを経て 96 年まで同地に滞在するなかで、ようやく自分の絵をつかみ始めます。勢いのある筆で、3 メートルを超すような大画面に描き出されたのは、生姜のようにも、障壁画の松の巨木のようにも見える形で、その異様さと滑稽さは、現在に続く長谷川の絵の始まりをしるすものといえます。

長谷川の作品に繰り返し登場するナスやキュウリ、バナナや魚といったモチーフは、伝統的な静物画を換骨奪胎したようであり、ドレープや椅子の脚といった西洋由来のモチーフも、意味を剥奪されたただの形として画面を自在に組み立てるパーツとなっています。こうして限られた要素だけを用いながら常に違う絵を描こうという長谷川の大胆な試みは、ときに行き詰まり、2013 年には発表を休止するに至ります。しかしその長い潜伏期にも制作は続けられ、2019 年に個展を再開すると、以後、長谷川は精力的に発表を続けてきました。わずかな絵具を伸びやかに使い、極限まで切り詰めて描き出された最近作は、あたかも内側から発光しているようで、初期からの道のりを顧みれば驚くほど変化していることに気づかされます。

本展では、長谷川の長年の制作を新旧織り交ぜながら紹介し、そこにある徹底した意志と軽やかな展開とを明らかにします。また古今東西、多くの作品を見ることに徹してきた長谷川の眼と、一方で、高尚な芸術とは別に、幼少期からの生活のなかで育まれた独自の感受性にも着目し、当館コレクションと長谷川の作品および彼の雑多な蒐集品とで構成した一室を設け、その世界を体験していただきます。

長谷川にとって美術館での初の大規模個展となる本展をぜひ、ご覧ください。

展示点数

油彩画約 120 点ほか、ドローイング、資料など。

展覧会の見どころ　1　未発表作を含む初期作品を紹介

1989年からおよそ4年間のドイツ留学時代。それまでの絵を葬ろうと試行錯誤した作品は、自らを弔う墓石のようにも見えます。帰国後、長らく開梱せずに留めておいた貴重な油彩画を含む、ドイツ時代の試行の軌跡をたどることのできる作品をまとめてご紹介します。

タイトルなし 1990年 作家蔵

2　オランダ時代の絵画を一堂に展示

長谷川は、オランダでの制作の日々のなかで、ようやく自身の絵画をつかむことになります。生姜をモチーフにした 3 メートルを超す絵画は、今に続くスタイルの始まりといえるでしょう。未公開作品に加え、山口県立美術館の秘蔵作品を通して、その前後の飛躍的な制作の展開をご紹介します。

タイトルなし 1994年 山口県立美術館蔵

3　オリジナル壁紙を背に作品を展示

西洋生まれの「絵画」と格闘してきた長谷川は、作品を展示する空間についても自問してきました。西洋の模倣、まがいもの文化に囲まれて生活してきたと述べる長谷川にとって、キッチュな壁紙に覆われた部屋こそが、それに相応しいものに感じられるといいます。本展の一室では、長谷川がデザインしたオリジナルの壁紙を背に作品を縦横無尽に展示します。

オリジナルの壁紙

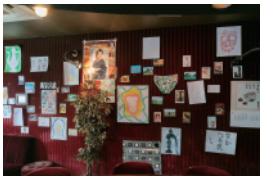
4　本展に向けて制作した大小の新作を展示

本展の開催に向けて制作した新作を複数点展示します。なかでも、およそ 30 年ぶりに手がけた 3 メートルを超す大作は、新たなモチーフを得て、さらなる作品の変化の兆しをみせています。豊田市美術館の天井の高い空間でぜひご覧ください。

《死ゲル－木》2026年 作家蔵

5　豊田市美術館コレクションとのコラボ展示＋ヴィトリーヌ展示

長谷川は古今東西、様々な絵画を見て、自作の制作の糧にしてきました。展示室5では、ルネ・マグリットやウィリアム・モリス、会田誠など、長谷川が選んだ豊田市美術館所蔵作品と共に、長谷川作品を展示します。また高尚な芸術とは別に、幼少期からの生活のなかで育まれた長谷川独自の感受性にも着目し、ガラスケースのなかに、彼の雑多な蒐集やドローイングからなる煌びやかな世界を展覧します。



左）《死ゲルのヴィトリーヌ 2023》「あざみ野コンテンポラリー vol.14 長谷川繁 1989－」2023年（横浜市民ギャラリーあざみ野）展示風景（参考）

右）「喫茶・スナック 死●ゲル」2021年（旧喫茶・スナックユカ）展示風景（参考）

関連事業

1　作家による半日ギャラリートーク

長谷川自身が、展示室で作品を見ながら、半日におよぶトークを行います。
最初から最後まで話を聞いていただいても、途中で抜けて他の展示室に行かれても、また戻ってきて話に参加していただいても、ご自分のタイミングで自由にしていただいて構いません。
日　時: 11月1日（日）、1月10日（日）　両日とも午後1時〜5時
会　場: 展示室
＊参加には、当日の長谷川繁展観覧券が必要です。

2　対談: 長谷川繁氏×清水穣氏（同志社大学教授）「絵を語る」

本展図録に寄稿予定の清水穣さんとの対談を行います。長谷川さんの「バッド（Bad）」な絵の追求について、鋭く切り込んだ話が展開されることでしょう。
日　時: 11月15日（日）　午後2時〜
定員先着170名　聴講無料
会　場: 美術館講堂

3　担当学芸員によるギャラリートーク

日時: 10月25日（日）、12月13日（日）、1月16日（土）　各日午後2時〜3時
＊参加には、当日の長谷川繁展観覧券が必要です。

＊その他関連イベントも予定しております。詳細は、美術館ウェブサイト、SNS等でお知らせします。

お問合せ

豊田市美術館　〒471-0034　愛知県豊田市小坂本町8丁目5番地1
HP:https://www.museum.toyota.aichi.jp　　e-mail:bijutsukan1@city.toyota.aichi.jp

- 展覧会に関すること　　学芸担当：千葉、都筑　　Tel 0565-34-3131
- 掲載依頼・取材等に関すること　　広報担当：西本、大柳　　Tel 0565-34-6748

「長谷川繁　ペイン天狗」広報用画像について

Toyota Municipal Museum of Art
豊田市美術館

当館ウェブサイト「広報用画像ダウンロード」申込みフォームより、ご希望の画像を申請してください。
「広報用画像ダウンロード」の画像提供サービスは、パソコンでのみダウンロード可能となります。
パソコンからのお申し込みが難しい方は、以下を記入のうえ、Fax（0565-36-5103）でお送りください。

お名前　　様　　ご所属

Tel　　e-mail

必要な画像の番号

掲載紙／メディア名　　発売、放送予定日　　月　　日（　　月号 vol.　　）

1

2

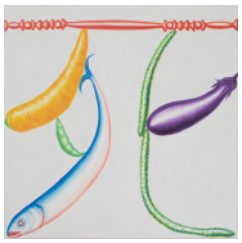
3

4

5

6

7


8

9

10

1　タイトルなし　1990 年　作家蔵
2　タイトルなし　1994 年　山口県立美術館蔵
3　タイトルなし　1997 年頃　作家蔵
4　タイトルなし　2006 年　作家蔵
5　タイトルなし　2008 年　作家蔵
6　タイトルなし　2008 年　mado collection
7　タイトルなし　2018-19 年　作家蔵
8　《死ゲル》　2021 年　豊田市美術館蔵
9　《種まく人 (男)》　2020 年　作家蔵
10　《種まく人−みかん》　2021 年　作家蔵
11　《酢毛悪郎　怒りの収穫編》　2023 年　mado collection
12　《死ゲル−木》　2026 年　作家蔵

11

12

＊タイトルなし の作品は、制作年、所蔵先、クレジットを表記してください。
【クレジット】全点にCopyright the artist
Nos. 3,5,10,12: photo by Tamotsu Kido ／ Nos. 4,6,7,8,9,11: photo by Kenji Aoki, courtesy of Satoko Oe Contemporary

資料の使用には以下の点にご注意ください。
・作品写真のトリミング、文字のせはご遠慮いただき、所蔵先、クレジットも表示してください。
・ご紹介いただく場合は、情報確認のためお手数ですがゲラ刷り等をお送りください。
・情報掲載後、献本または情報公開後の報告をお願いします。
・本展の紹介でのご使用後は、各メディアの責任のもと画像データを削除破棄してください。

美術館使用欄　　画像提供の依頼日　　年　　月　　日　　□画像送付 □校正 □修正 □配信・配本